

# 吉村誠司 展

## 硝子を透して

【会期】 9月25日(水)～10月1日(火)  
 【会場】 西武池袋本店 6階(中央B8)  
 =西武アート・フォーラム  
 豊島区南池袋1-28-1  
 ☎03(5949)5276(直通)

よしむら・せいじ  
 1960年福岡県生まれ。85年東京藝術大学美術学部絵画  
 科日本画専攻卒業、サロン・ド・プランタン賞。86年東  
 京セントラル美術館日本画大賞展優秀賞、春の院展初入  
 道。87年院展初入道。88年有芽の会法務大臣賞。90年  
 東京藝術大学大学院美術研究科博士後期課程満期終了。  
 96年院展日本美術院賞・大観賞(98年)。2000年院展  
 足立美術館賞(11年)、日本美術院同人推挙。05年春の  
 院展春の足立美術館賞。07年院展文部科学大臣賞。10  
 年院展内閣総理大臣賞。11年共同通信社配信「随想」挿  
 絵担当。現在日本美術院同人、東京藝術大学日本画教授。



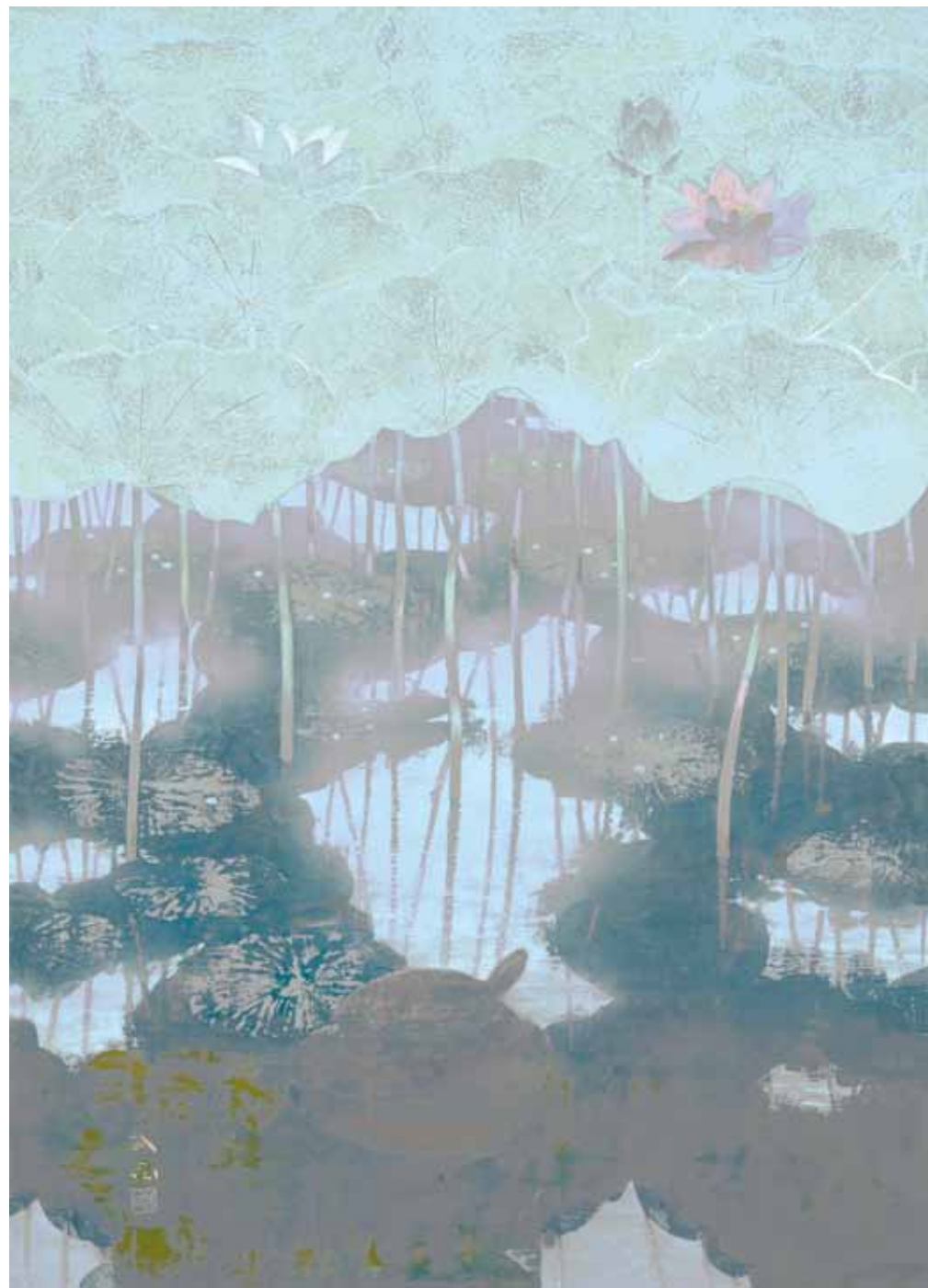
「オアシス(陽関にて)」20号P



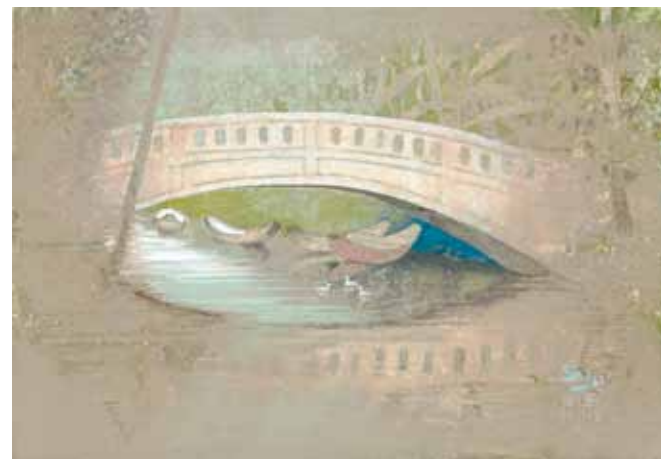
「長閑」10号P



「澄み渡る」15号P



「蓮池」30号P



「橋と水面」SM



「交差点」SM

「観察と創作の接点でバランスを探り、自分を通じた新たな世界を表現できたら」と思い、日本画を勉強してきました」  
 右に記したのは、今展の図録に寄せた吉村誠司による挨拶文の一節である。  
 この場合の観察は、実際の現場で様々な感覚器官を働かせて行う身体的な行為を基礎とする、外向的なものである。それによって常に変化する自然の「ありのままの姿」を捉えるという困難に向かい、単なる描写にとどまらないスケッチをする。そうした観察を吉村は「絵画の根源」と指摘する。  
 創作は、内面的な行為が基礎となる内向的なものである。その基礎を支えるのは、創作者のそれまでの環境や経験などである。その中でも吉村は勉強を重視している。曰く「勉強とは、いろいろな表現制作を試みることで過去の様々な作品を知ること」という。知ることで過去になかった世界観を模索し、オリジナリティを志向できる。日本画の伝統は連綿と繋がり、風土に根付いた文化の延長線上にあるために、過去に遡って得られる膨大な情報が蓄積されている。  
 冒頭の一節に戻れば、身体と内面の接点は画家自身であるから、自身の内外のバランスを探ることによって、「新たな世界を表現」しようとしている。今回発表される新作を見るときに、画家がどこで何を観察し、どこから何を創作しようと真摯に向き合ったのか、画面を見ながら感じてみたい。  
 (編集部)